

NEWS FID +

CONTENTS

授業レポート

「理学療法技術実習B」理学療法学科 冷水 誠	1
「看護倫理」看護医療学科 堀江 尚子	2
「老年医学」健康栄養学科 前原 佳代子	4
「プロジェクトゼミA・B」人間環境デザイン学科 前川 歩	5
「算数科概論」現代教育学科 椎名 美穂子	6
FD研修会レポート	8
2022年度FD活動報告	10

授業レポート

「理学療法技術実習B」

理学療法学科 冷水 誠

3回生後期に開講される「理学療法技術実習B」では、理学療法評価について実際の患者さんを想定した実践力を高めることを目標としています。具体的には、2回生時に学習した理学療法評価の各検査・測定におけるその知識と技術について、臨床に必要とされる技術の適用方法や結果の考察の仕方について、解剖学や病理学といった基礎知識をどのように繋げているのか、患者さんに合わせてどのように適応させるかなどについての考え方を身につけることを目標としています。さらに、患者さんの動作上の問題点を見つけるために必要不可欠である動作観察・分析技術について、解剖学や病理学に加え、2回生および3回生前期にて学習した運動学などの知識から理論的な思考力の向上も目的としています。



今回の研究授業では、その「動作観察と分析」についての演習を実施しています。この動作観察では患者の動作を観察することによって「その動作が日常生活において問題なく遂行可能かどうか」を明らかにし、もし問題があれば「いつ」「どこが」「どのように」問題であるかを取り上げます。次に、その問題がどのような機能の障害によって引き起こされているのかを観察される現象から推察する技術である動作分析が必要となります。従って、単純な基礎知識だけでなく、それらの知識を統合し論理的に問題点を分析する技術をトレーニングすることが重要となります。そのトレーニングには当然ながら反復が必要であるため、連携実習病院である西大和リハビリテーション病院と協力して作成した実際の患者さんの動画を利用し、6コマ以上に渡って観察と分析の演習を実施しています。



実際の演習方法では、特に分析経験がない段階では学生個人での観察・分析は非常に難しいため、グループワークを通じてスキル向上を図っています。グループワークではさまざまな学生の考え方を知ることができ、非常に有効な方法であると同時に、グループ人数が多くなることや、技術の乏しさによっては「私ができなくてもグループ内の誰かが行ってくれる」といった状況に陥る学生が出てしまう可能性があることを危惧しています。そのため、この演習では①最初の20～30分の時間は個人にて観察・分析を考へてみる②グループワークの実施(必ず学生1人ずつ発表の時間を設ける)③各グループの考えを学年全体でディスカッションする④教員の観察・分析結果を提示、という手続きを設けています。さらに、6名までの少人数にてグループワークとする、各グループは授業ごとにメンバーをランダムに入れ換えるというルールも設けています。この手続きとルールによって、学生個人が「気づく(気づくようになった)部分」と「気づかない部分」を自覚でき、その気づかない部分に対して多くの他人の意見を聞くことができ、より有効な観察・分析力の向上に繋がるのではないかと期待しています。また、④の学年全体でのディスカッションにおいては私がファシリテーターとして学生からの意見を否定しないよう配慮し、私自身も気づけていない部分があることを示しながら、より多くの視点とその考え方を学年全体で共有できるように心がけています。さらに、授業終了後には使用した動画をweb上にアップすることで、必要に応じて学生個人にて復習できるようにしています。



今回の研究授業を通じて自身の演習方法を客観的に振り返ることができ、また、参加頂いた先生方から多くのご意見を頂くことができ、より学生のスキルを向上させる実践方法にブラッシュアップしていきたいと思ひます。最後に、研究授業という貴重な機会を与えて頂き、ご参加およびご意見頂いた先生方に感謝申し上げます。

「看護倫理」

看護医療学科 堀江 尚子

2022年6月7日に実施しました授業研究を報告いたします。

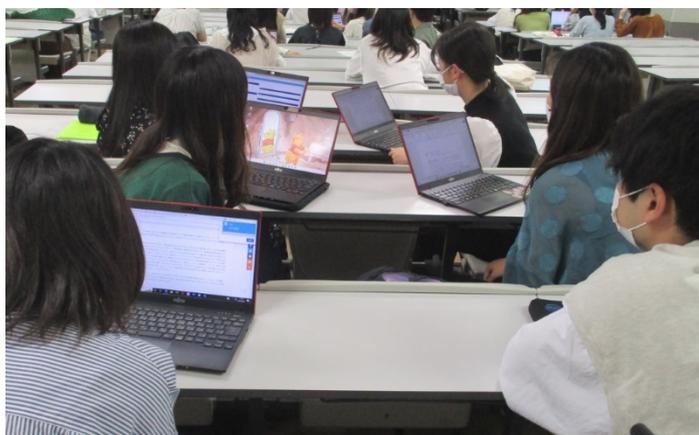
本科目は自身で深く考えることに重点を置いています。看護ケアの場面で、ときに対峙する多様な価値観を吟味し、倫理的観点からそれら各々の存立の意味と共存の方法を考察でき、看護倫理に関する基本的知識と倫理的意志決定の枠組みを理解し活用できる、ということを目指しています。

本科目の学期前半の授業は、前回授業のフィードバック、知識の伝達部分の講義、参加活動が要求されるグループワークから構成されています。前回授業のフィードバックでは学生が



グループワーク討議記録課題として提出したレポートへのコメントを伝えます。知識の伝達部分の講義部分は、倫理とは何かから始まり、正義論、目的論、義務論など、順に学びます。グループワークでは二つの課題があります。一つはその日の授業に関連したもので、もう一つは、学生が実際に経験した医療に関するジレンマの課題に関連したものです。後者は 6 回のグループワークを通じた積み上げ式課題であり、議論を深めて学期の後半に発表を求めています。単元毎のグループワークの討議記録は所定書式に記録し、OpenCEAS に提出します。これが冒頭の前回授業のフィードバックにつながるものです。

学期後半は外部講師の講演を経て学生のグループワークの発表会を実施し、相互評価を行います。発表内容は、それぞれのグループがメンバーの実際に経験した医療に関連するジレンマについてのグループ討議の成果です。学生はすべての発表に対しルーブリックによる個人評価を行います。評価の項目は事前に学生に提示しており、資料とともに発表を視聴して、グループワークの成果の内容と成果発表の準備状況については 3 段階で評定することを求めます。また自由記述も必須回答としてあり、発表会終了後に自由記述の内容を匿名として開示しています。学生は自分たちのグループの発表が他の学生からどのように評価されたのかフィードバックを受けます。



授業研究の第 8 回では前半の講義の後、後半のグループワークに授業研究にご参加いただきました 8 名の先生方に各グループワークにお入り頂きました。グループワークは、講義内容のケアの倫理についてのディスカッションと、発表会に向けた課題としての「発表の骨格を作成する。自分たちの伝えたいことを伝える効果的工夫を考える。」というものでした。ご参加いただきました先生方はオブザーバーを担っていただき、終了時にグループメンバーの学生へコメントを頂きました。

授業研究検討会には 5 名の先生方にご参加いただき、グループワークの様子をフィードバックして頂きました。グループによっては、オブザーバーで参加の教員に、継続して話し合っていることを丁寧に説明するところもあれば、そうでないところもあったようですが、概ね活発な議論となっていたようです。しかし議論の内容は表面的な意見の確認になっていて、どうしてそのように考えるのかという深い議論になっていない一面もあったようです。他の意見も踏まえて検討会では、教員間で科目を超えて効果的なグループワークの実践についての意見交換の必要性を確認しました。本科目は 100 名を超える受講生が対象で、担当一人ではグループワークの様子を詳細に観察することが不可能であり、今回の検討会のご意見は大変貴重なものでした。ご参加いただきました皆様に感謝申し上げます。



「老年医学」

健康栄養学科 前原 佳代子

「老年医学」は理学療法学科 3 年次前期に開講される必修科目です。高齢者に特徴的な症候と疾患を学び、高齢者を取りまく環境、社会の高齢化にかかわる諸問題について考える科目です。第 11 回では運動器疾患を扱いました。受講者にとってこれまで他の科目で勉強した疾患です。

私はおもに解剖生理学や臨床医学の科目を学科、学部を跨いで担当しています。コロナ禍において行われた遠隔授業や制限付きの対面授業から、それぞれの授業形態のよいところや欠けてしまうところを考えて、今年度は主体的な学びと協働的な学びを実践する対面授業を目標にして、模索しながら授業を行っています。

座学の授業では、教員が受講者に向けて一方向で解説をしたり、1 回の授業で伝えたいことを欲張り、内容が膨れ上がって時間を気にしながら早口で解説したりして受講者をおいてけぼりにしてしまうことが生じがちです。入職後 2 年ほど、このような授業を実施していました。授業アンケートによる受講者からのフィードバック、FD 研修、教育学などの書籍、そしてコロナ禍における遠隔授業(動画配信や課題付与)の経験から、① 受講者が教科書を読むことや教員が解説することは時間外に行える、② 対面授業のよさ(強み)は生身で受講者どうしが議論し発表することができる、③ 授業の主役は受講者である、と考えました。そこで「老年医学」の対面授業では、受講者がお互いに教えあう、学びあう機会を提供するグループワークを取り入れています。授業内容の肝になることをグループワークの問いにします。教員が答えを簡単に与える講義と異なり、受講者は問いを調べてまとめることで、自分たちで答えを考えます。そしていくつかのグループが発表し、発表したグループの答えや考えを傾聴することで、受講者に新たな気づきがあるようです。教員の補足説明も傾聴して寝落ちする受講者が少ないと感じます。

研究授業の冒頭では、受講者に骨粗鬆症・骨折、変形性関節症、時間が余れば関節リウマチを扱うこと、グループワークは骨粗鬆症・骨折についての問いが2つあることを伝えました。3 回生ということもあり、グループワークではフリーライダーになる受講者はおらず、熱心に話し合っていました。毎回有志のグループが発表を行います、かなりのグループが挙手します。今回の授業では1つの問いに3グループが発表しました(挙手しても発表できなかったグループもありました)。授業の終了時に、グループワークのシートを回収し、授業後に必要に応じてコメントをつけたシートを授業支援システム OpenCEAS にアップしています。発表の機会がなかったグループの答えや考えを受講者どうし閲覧できます。



座学の授業にグループワークを取り入れることで、受講者が主体的に作業する時間を確保することができます。一方、1回の授業で扱える疾患は数疾患と限られます。「老年医学」では、医学書院の『標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野老年学 第5版』を教材として使用していますが、記載されているすべての疾患を解説することはできません。受講者が医療現場で高齢者と接するときに必要な・重要と思われる疾患を授業で扱うようにしています。事前に授業内容がわかるように、各授業回の教科書の範囲を示したファイル、スライド資料をOpenCEASにアップしています。授業後にはコメントつきワークシートに加えて、各授業回のポイントを示した学修チェックリストをOpenCEASにアップし、振り返りに利用できるようにしています。「主役である受講者の学びを深めることができる授業とは」を考えて模索する日々が続きます。

試行錯誤しながら授業を行っているなか、研究授業の機会をくださり、ありがとうございます。お忙しい中、研究授業・授業検討会にご参加いただき意見交換をしてくださった先生方にお礼申し上げます。また、動画撮影をしてくださった職員の方々に深謝いたします。

「プロジェクトゼミA・B」

人間環境デザイン学科 前川 歩

「プロジェクトゼミA・B」は2年生と3年生に配当された授業です。卒業研究の前段階として、各教員があらかじめ設定したテーマについて9つのゼミに分かれ、調査の進め方、論理的思考の展開、まとめの方法を学びます。2年生・3年生合同の学年を越えたグループを組み、フィールドワークや学生相互の話し合いを通して、具体的な課題を見つけ出し解決策を考える力を身につけることを目的としています。

研究授業は、9ゼミ合同講義として実施されたものです。奈良県大和郡山市に所在する奈良県立民俗博物館・大和民俗公園での歴史的民家の実地見学に際し、その事前講義として「民家のみかた」をテーマに、民家建築の観察の仕方やその歴史的価値のあり方について解説を行いました。



講義では、受講した学生が以下の状態に到達することを目指しました。

- ・実物の民家建築を観た際に、構造、間取りいずれにおいても、独自の着眼点をもって観察することができる
- ・細かな判断はできないまでも、民家建築の編年を理解している
- ・民家建築の変化の背景について理解している

民家建築の把握の方法は様々ありますが、講義ではその根幹となる「構造」と「間取り」の2つの側面からのみかたを提示することにしました。これらの2つの側面から、民家が原初的な形式からどのような発展を遂げたのか、民家建築の大きな変化の流れを解説しました。民家建築の発展は大きくみれば、「構造」、「間取り」における課題解決がその背景にあります。具体的には、耐久性の向上や室内規模の拡大、工程の効率化、部材数の削減、部材の小断面化などです。こうした生活や生産を行う上での素朴な課題に対応するために、民家建築はその姿を変えてきました。この点を理解することで、民家建築は

古く今と関係のない歴史的な建築としてだけではなく、現在とも繋がりのある非常に身近なビルディングタイプとして捉えることが可能となります。

こうした座学で学んだ知識を、すぐに実際の歴史的建造物で確認できるロケーションにキャンパスがあることは、本学の強みとも言えます。歴史的建造物が多く残る奈良という場所は、建築やインテリアを学ぶ上で最良の環境です。こうした場所ならではの教育の方法を、今後も引き続き検討していきたいと思ひます。



「算数科概論」

現代教育学科 椎名 美穂子

日々に流され、授業に振り返って内省することができずにおりました。今回、FDの研究授業の機会をいただき、ほんの少しですが、自分の授業を客観的に考えることができたような気がします。また、昨年度本学に着任するまでは、発表したり自ら挙手したり、自ら予習をしたりする積極的な姿を学生に望むことは難しいことであり、大学生には不似合いなことではないかとも思っていました。しかし、今、この原稿を書き始めながら、本学の学生が、そのような私の固定観念を変えてくれたことに気がきました。研究授業は、自身の授業、学生の学びの姿を変える契機を含む大切な機会であると思ひます。



学生にとって「算数」とは、小学校時代の経験を踏まえたら容易にできる「知っている内容」という捉えがあります。昨年度は2年生以降の学生が「算数なら教えられます」という言葉を何度か耳にしました。しかし、算数の問題が解けるからといって、算数を教えられるのに十分な力が身につけているかという、そうではないことを謙虚に認識して学修する必要があると思ひます。これは算数・数学教育に限らず、他授業科目においても同様なことがあるのではないのでしょうか。

本授業は、予習の共有-数学的問題解決(数問)-振り返り・次回の予習計画という構成にしており、学びの連続性を保つように心掛けています。

以下、枠囲みは、学生がOpenCEASから提出した本授業の振り返りです。

- ①具体的な図形問題をグループ活動を通して、自分が持っていない考えを得ることができました。内包、外延の概念を聞いた時、どう違うのかわからなかったが、何人かの説明を聞いて理解が深まった。
- ②三角形の外角の和の求め方に思いつかなかった考え方が出てきて新鮮だった。
- ③私が今回体験したことを述べる。三角形の外角の大きさを求める問題で私が解き方を理解することが出来ず困っている時に、同じ班のメンバーが教えてくれたことで理解することが出来た。
- ④(他の学生が)周りに問いかけながら説明する余裕がある事がすごいと思った。

上記の①～④は、他者との協働的な学びの重要性につながる内容です。他の人の算数の解法に新鮮さを感じたり、説明の仕方に感動したりしている記述からは、本学の学生らしい素直な学びをする姿と向上心が見えました。

⑤自分は算数や数学の中で図形の問題が一番得意だったが、構成要素について理解が足りていない。いざ説明できるかというそうではなかったので他人に説明できるレベルにしたい。

⑥ジオボードの問題で発表させてもらったが、今回はもっと理路整然と説明できるように努力したい。

⑤⑥の記述から、理解できていると思っていたことがそうではなかったことを謙虚に受け止めている姿が見えました。このような学生の姿から私自身も学びたいと思いました。

⑦全体ワークでは、外角が 360 度の(学生)の説明を聞いて、新たな発見や大きな驚きがあった。次回も新たな発見に出会えるように、事前の予習で自分の考えを大まかに持っておきたい。

⑦の記述では、新しい発見をするためには、予習をして自分の考えをもつことが必要だと見出したことに注目したいと思います。「与える予習」から「探究のための予習」への転換を図りたいと思います。

⑧子どもは、まずは自分の分かり易いことから具体物から形を捉え、その次に構成要素を捉え、最後に関係概念(構成要素の関係)を捉えることが分かった。

⑨どのように考えるのか、子どもたちのつまずきも意識してやっていきたい。

⑩演繹や帰納法など中学校や高校などで学ぶ基礎なども小学校の時点で学んでいると感じた。

⑪今回の講義で教授が行っていたような、生徒たちから、他例をもらうようなことをすることで意欲的な授業になるなど思った。

⑧から⑪の記述からは、数学的問題解決の過程で学習者(児童・生徒)の立場に立ち、概念形成、系統性、授業作りを意識した姿が見えます。数学的な背景や認知の特性を理解することにより、知っていたはずの算数を捉え直し、教壇に立つことを意識しながら具体的に考えることがこの授業の目的でもありました。

本授業の改善点は多々ありますが、その中でも「算数」という言葉に私自身がとらわれ、「数学」の世界に踏み込んでないことが見えました。例えば、「 $1+1=2$ 」といった単純な加法をペアノの自然数論から深く追究し、捉え直しをする場面の設定です。

主体的な学びを基軸に据えて、算数から数学の世界につながる授業を再考し、学生②⑦にも観られるような感動、発見、算数・数学の美しさといったことを、体験を通して感得できる学修を目指していきたいと思っています。



FD 研修会レポート

2023年2月21日(火)、本学教職員(非常勤教員含む)を対象とする「FD 研修会」が開催され、43名の教職員の方にご参加いただきました。



研修テーマは「学生の声に耳を傾ける～学生授業評価の理論と実際」。神戸大学名誉教授で現在、放送大学兵庫学習センターに所属しておられる米谷淳先生を講師にお迎えし、ご講演いただきました。

米谷先生には、2019年度のFD研修会(2020年3月開催計画)で本学へ講師としてお越しいただくべく準備を進めていましたが、予想もなかった新型コロナウイルス感染症の発生によって中止を余儀なくされました。それから3年の月日を経て今回、ようやく本学でのご講演を実現することができました。



今回のご講演は、「学生の声に耳を傾けることの大切さ」が主題でした。まず前提として、

- ・対人コミュニケーションの基本は相手(授業の場合は学生)の声を聞くことから始まる。
- ・特に、自分が相手に送ったメッセージに対する相手からの送り返しをしっかり受け止めることが大切である。
- ・学生の声を生かすためには、事後対応としてのフィードバックではなく、事前準備としてのフィードフォワードができるようになることが必要で、それによりさらに授業がより良いものになっていく。

と、先生のご専門である社会心理学の視点を踏まえながら解説していただきました。

その上で、「学生の声」を聞く代表的な手段である「授業アンケート」のあり方へと話題は移りました。

現在、本学も含めて全国の大学で学生による「授業アンケート」が実施されていますが、その活用状況はさまざまで、必ずしも有効に生かし切れているといえません。回答率の低さに悩んでいたりと、実施しただけで振り返りフィードバックがうまくなされていなかったりと、多くの大学が課題を抱えています。

今回の研修では、事前に本学におけるアンケート回答状況の概略(個人情報等をすべて除いたもの)を先生にご提示し、分析をお願いしていました。先生は分析結果として、

- ・学生の多くが改善してほしい事項として挙げているのは「授業の進め方」「説明の仕方」「音声・画面等」「資料」「課題」の順に多いこと
- ・授業の運営方法等について建設的な意見を投げかけているコメントが少なくないこと

他にも自分自身の(授業を受講する上での)改善点が書かれているもの、教員の改善に対する評価が記されているものなど多岐にわたっているが、どれも学生が非常に真摯な姿勢でアンケートへの回答に臨んでくれていることが伺えること

などを示されました。また、コロナ禍によって急速に広まった「対面授業」と「遠隔授業」それぞれの特徴や工夫すべき点についての示唆が多く含まれていると指摘されました。

このように教員の授業への真摯な取り組みをポジティブに受け止めて評価し、さらにそれをより良くするためにはどうすればよいかを、学生が自分なりの言葉で提案しようとする姿勢が見て取れるアンケート結果であるからこそ、そうした声にどのように向き合い、どう生かしていくかを深く考えることが必要です。



これまで大学教育や看護教育、保育士養成等、様々な分野の研究をされてこられたご経験に基づくお話は、実学教育を実践し、社会の第一線で活躍できる対人援助職者を多く輩出する本学にとって、特に学びや気づきの多い有意義な研修会となりました。ご講演いただきました米谷先生に厚く御礼申し上げます。

2022年度FD活動報告

前期

- 4月1日 新任教職員研修会
- 4月5日 OpenCEAS説明会(新任者対象)
- 6月7日 看護医療学科 研究授業(「看護倫理」堀江 尚子)
- 6月24日 健康栄養学科 研究授業(「老年医学」前原 佳代子)
- 7月19日～ 前期授業アンケート実施
- 9月上旬 前期授業アンケート集計結果のフィードバック・授業改善アンケートへの回答依頼

後期

- 9月30日 人間環境デザイン学科 研究授業(「プロジェクトゼミA・B」前川 歩)
- 11月19日 理学療法学科 研究授業(「理学療法技術実習B」冷水 誠)
- 12月2日 現代教育学科 研究授業(「算数科概論」椎名 美穂子)
- 1月10日～ 後期授業アンケート実施
- 2月21日 FD研修会「学生の声に耳を傾ける～学生授業評価の理論と実際～」
(放送大学兵庫学習センター 米谷淳先生)
- 3月上旬 後期授業アンケート集計結果のフィードバック・授業改善アンケートへの回答依頼

*2022年度は、3年ぶりに「研究授業」「授業検討会」を、また、2年ぶりに「FD研修会」を再開することができました。
2023年度の研修会等の日程は、決まり次第お知らせいたします。2023年度も本学のFD活動に対し、ご理解ご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。